

## ■ 授業者より

### 1. 本題材の工夫点

- ・音楽を形づくっている要素を「音色」「リズム」に焦点化し、それらをよりどころにして学習を進められるよう題材構成を工夫した。
- ・児童が演奏する節を自分で選択できるようにすることで、音楽表現への思いを実現できるようにした。
- ・同じ素材の楽器をまとめて配置することで、互いの音色を聴き合ったり演奏の工夫を教え合ったりし、音楽のよさや面白さを追求できるようにした。
- ・振り返りをデータ化、保存・蓄積することで、自分の学びの足跡をいつでも確認できるようにした。
- ・振り返りを端末を用いて共有することで、いつでも他者の考えを参考にすることができるようにした。

### 2. 成果

- ・自分で選んだ節の歌詞の内容を想像したことにより、出したい音色のイメージが明確になり、表現の工夫につながった。
- ・本時では「音色」に焦点化して指導することで、自らの思いに合った音色を追求する姿が見られた。
- ・端末を活用することで、好きなタイミングで音源を流しながら練習することができた。
- ・振り返りをデータ化することで、自己の学習状況をいつでも振り返ったり共有したりすることができた。

### 3. 課題

- ・他者との協働を通じて表現の工夫を追求する場については、よりよい方法を考えていく必要がある。
- ・音楽を形づくっている要素を意識させるために、使用する楽器の種類や数を検討していく必要がある。
- ・学習したことが生活や社会とどのように関わっているのかを意識させる指導が必要である。

## ■ 研究協議（主なものを抜粋：●質問、→答え、◆意見）

- 児童は、演奏の仕方による音色の変化を、学習前から知っていたものなのか。それとも、学習活動の中で気付いたものなのか。  
→今回の学習活動を通して気付いていった。これまでの音楽の時間で気付いていた児童もいたようだが、実際に楽器を触り、試行錯誤することによって、その気付きを確かなものにしていった。
- 身の回りの物を使って音を出すこと、楽器を使って音を出すことは違うことなのか？  
→楽器も身の回りの物も「音」が出ることには変わりなく、区別する必要はない。本題材では、題材の最後の時間に、目覚まし時計のベルの音を演奏の中に取り入れている動画をみた。その中で、楽器だけでなく、身の回りの物を用いても音色を工夫できることを確認した。
- ◆音楽的な表現をしたいのであれば何を使ってもよい。表現したい音色を明確にし、それに合うものや音の出し方を追求する学習過程と、楽器などで様々な音に触れ、そこでの気付きを基にして表現したい音色を明確にする学習過程がある。
- 今回の授業では、曲に対してどの楽器が合うのかということを理解させることも含んでいるのか？  
→どの楽器が合うという正解はないと考えている。それぞれが歌詞の内容から想像した音色のイメージにつなげていけることが重要。今回は、緩やかな協働を生むために、木でできた楽器・金属でできた楽器・皮を張った楽器の3つに分けた。
- ◆協働の必然性をもたせるためには、判断を先にするとよい。思考してから判断すると、考えが拡散するため、考えをまとめることが難しくなってしまう。一方、判断してから思考すると、考える目的が明確になるため、児童は考えやすくなる。
- グループで考えるのではなく、1人で考えるようにしたのはなぜか。  
→本校児童の実態として、それぞれが思いや考えをもつことができるよさがある。今回の授業では、一人一人の思いや考えを大切にするために1人で考える形をとった。

## ■ 指導助言

留萌教育局義務教育指導班 主任指導主事

横地 康恵 様

### 1. 本実践の成果

#### ①本時の学習の流れに関わって

- ・楽器に触れ、表現したい音色のイメージを明確にし、それを基によりよい表現を追求する時間を十分確保していた。
- ・追求したことをもちよって全体で共有し、共有したことを自分の表現に取り入れていくことは音楽科の学習において大変重要なことである。

#### ②教師の働き掛けに関わって

- ・活動中、教師が「どんな風によったの？」と問うことで、イメージと音色を結び付けて考える姿が見られた。また、楽譜とも結び付けて考える児童もいた。
- ・単純に音を鳴らして面白かったではなく、鳴らし方の意図を共有していくことが重要。教師の働き掛けによって、子供たちが感じ取って表現していることを、音楽の構造と結び付けながら捉えさせていく必要がある。

#### ③児童の姿から

- ・楽器の固有の音色や演奏方法の工夫による音色の変化への気付きを生み出すことができていた。
- ・楽器を手にとって演奏する活動を通して、楽器に対する愛着や興味を高め、他の楽器との違いを認識させることができた。

### 2. 今後に向けて

- ・楽器の音色と演奏の仕方の関わりに着目させるためには、楽器を教師が意図的に選んでいくことが重要。
- ・子供たちは、曲の歌詞や全体の流れを踏まえて楽器を選んでいる。そこに楽譜から感じたことと結び付けていくとよい。
- ・合唱奏の題材構成においては、指導内容の焦点化を図ることが重要である。今回であれば、器楽に焦点化し、器楽の学習を深めるための活動として歌唱を捉えるとよい。

## ■ 指導助言

北海道教育大学旭川校 准教授

芳賀 均 様

### 1. 資質・能力の育成に関わって

- ・どの教科・領域の学習指導要領解説にも総説が位置付けており、予測が困難な時代を生き抜く力を育成していくことが求められている。音楽もその例外ではない。

### 2. 音楽の授業づくりに関わって

#### ①「主体的」という言葉について

- ・「主体的」という言葉には「積極性」「自立性」の2つの側面がある。本授業においては、両方が見られたよい授業であった。

#### ②音楽の学びの特性

- ・音楽は試行錯誤が何度もスピーディーにできる。また、その結果が快・不快で返ってくる。それが音楽の学びの特性である。

#### ③音楽の見方・考え方について

- ・音楽の見方・考え方を働かせるには、「表現の結果」と「思いや意図」を鑑賞や表現でつなげていくことが重要。その際、共通事項や生活経験を基に論理的に思考することが必要。
- ・表現したいものによって表現は異なるし、表現したいものと同じでも表現は異なる。だからこそ、本授業のように「表現の結果」を基に「思いや意図」を翻訳し、共有する学習活動を位置付けていくことが重要である。そして、それを様々な題材で繰り返していくことにより、資質・能力の育成につながっていく。

### 3. 今後に向けて

- ・これからの音楽の授業づくりに関しては、知識を与えてそれを基に考えさせる授業ではなく、試行錯誤する活動を通して知識を構築していく授業が求められている。